

清談案の初巻 初編 乾

特
へ遠³
466
/





目會三

船宿の遊醒あそびさめは白しろの掃はきの
 文と巻まき舌しほ乃なり艶やま文ぶん喜き
 至いたかりひの強つよ異い見み八はち云い号ごうの
 腰こし押おしと下した地ぢ乃なり
 生物せいぶつ知ち

目會四

色いろ情なさけの只ただ中ちゆう々々意い菜さいの
 初はつ尾び吞の込こ高たか苗なほ相あ談だん
 今いまと別わか色の置おき土つち産うハ草くさ笥せきの
 合あ益やくあけて云い色いろぬ
 規き類るい中ちゆう

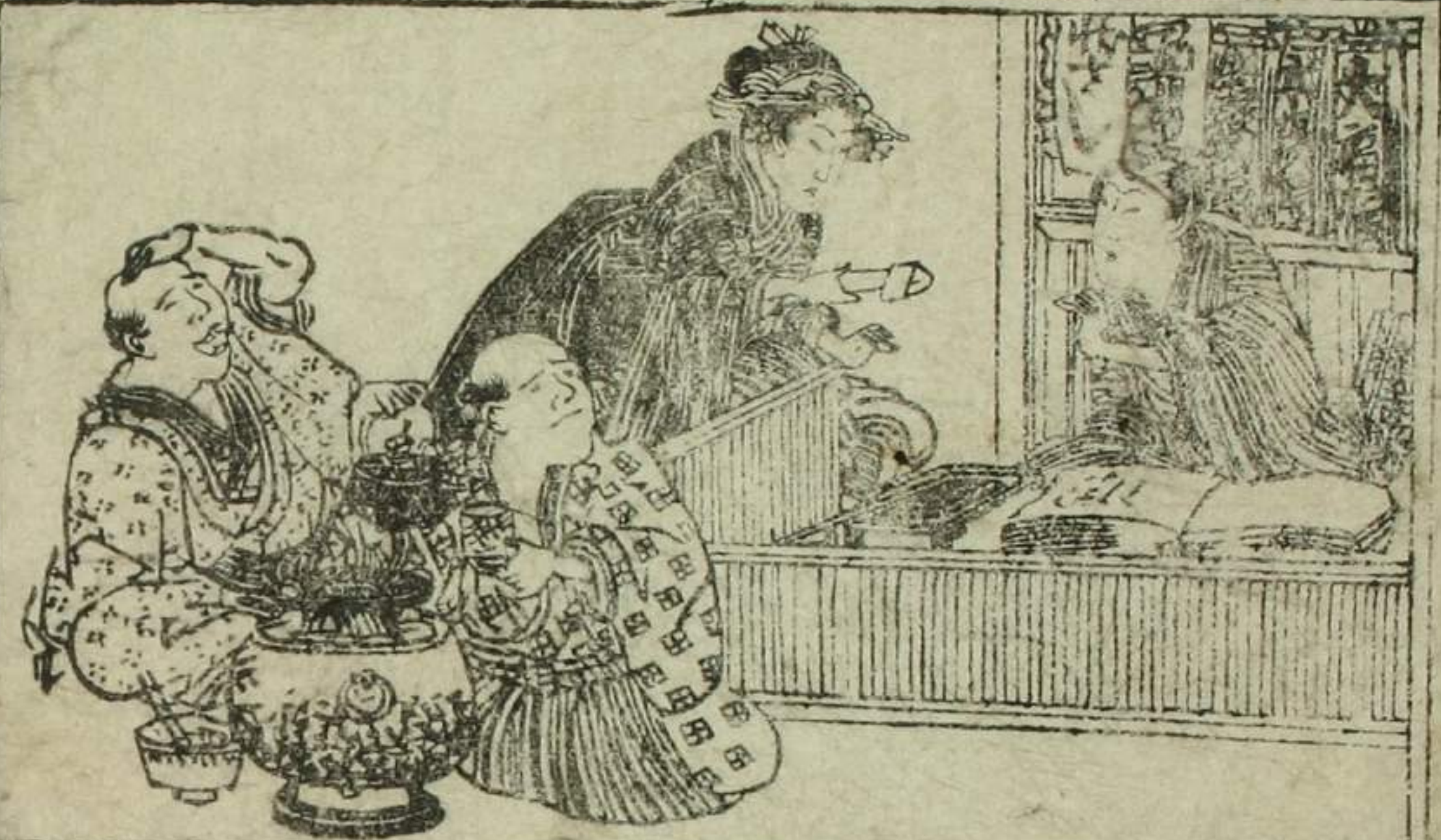


目會五

色いろ香か乃なりはよよい子の実み情なさけ
 包あむ余あま余あま金かね財さい布ふ小こ目め乃なり
 助すけ物ものくけく色いろ乃なり
 番ばん頭だう役やく

目會六

旅たび宿しゆくの羨あやま乃なり
 全ぜん一いつ面めんの堪た乃なり
 浮うむ思し乃なり
 教おし多おほ小こ乃なり
 血ち氣き集あつ



七會目

人情の極意 正直乃
 預み宿屋の物競 金子
 あら走 走 振ハ生 振乃
 仇惚の例て 来 親
 我立身

八會目

隠徳自 徳の 徳ハ異る 物
 あぢる魂 徳初め 持あり
 まる 徳の 重荷 重 代の
 頓作 子 子 つけ 子
 諸果 報

清談山鎮初花初編

上冊

叢會

記念の短刀ハ 夫婦の
 縁を久離の 子 子 子

請よ。おの事ひと 叶又ひと。人の徳り
 長るゆを志す。どのよ 執着するゆより。乃ぬ 屋よ
 神をとたやま。およ 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
 りあるか 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
 志て。其 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子



又そがねだ。毎本もゆき。まわらうとあつた。このうりの
 おんやう。日おく遠きあつて云はらうべし。おんやうであつた
 をかたひちあつて。いづれはまじくあつた。病人をまじく
 ろうけ。彼のひるよりのあつた。珠はは青志の島海に流山
 も及ぶと。死後のあつたのうちあつた。日おくあつた。まえ
 まで。後継の一助もあつた。わらうのあつた。さつた。うち
 女房の同家中の娘もあつた。あつたのうちあつた。あつたの
 約束もあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 ゆるせ。妻とあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 ゆるあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 出代はまじくあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 名考の罰也。女房あつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 ままあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 ままあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 生はあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 生はあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 生はあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの

又そがねだ。毎本もゆき。まわらうとあつた。このうりの
 おんやう。日おく遠きあつて云はらうべし。おんやうであつた
 をかたひちあつて。いづれはまじくあつた。病人をまじく
 ろうけ。彼のひるよりのあつた。珠はは青志の島海に流山
 も及ぶと。死後のあつたのうちあつた。日おくあつた。まえ
 まで。後継の一助もあつた。わらうのあつた。さつた。うち
 女房の同家中の娘もあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 約束もあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 ゆるせ。妻とあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 ゆるあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 出代はまじくあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 名考の罰也。女房あつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 ままあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 ままあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 生はあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 生はあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの
 生はあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたのあつた。あつたの

あやまら。中身よきままだん隠しつゝさきども。今入陰
方あく。此とて打ぬらるなり。さきども女公よ。さきども
恨もあらんが。何とぞ隠けりあり。かきあきせ
う人のそらこの子とちや。本良育し。捨や而のわくも
好もあつて。痛ぬらるごのわくも。さきども救むと。
お入てなまやちれ侍。女房え本負ふ夫のあめれば。
まこともる世のいろぬく。たごうのそを辨おしあま
かよむと。早んかちかかるめでたれるるし。秘を御ひ
ころあつたゆと中うぬく。まご子ごりの身よさるも見
おあつた行末のちうとさあつ。よとそ打ぬらるる
あつたあつたせらる。此と日さるわつたあつて。不承承させ
る。女房うねてのさきども。今とてあて
しる体よりて服し。脚も疲れたの公よ。さきども
かあつたの身持を先切させ。さきどもさきども
らるゆ人。福六公中よ。女房のさきどもを感し。かあつた
もさきどもを不承承をあきさうと。あつたさせし

あやまら

中身よき

ままだん

隠しつゝ

さきども

今入陰

方あく

此とて

打ぬらる

なり

恨もあらん

が

何とぞ

隠けり

あり

かきあき

せ

う人の

そらこの

子とちや

本良育

し

捨や而

のわくも

好もあつ

て

痛ぬら

るごの

わくも

さきども

救むと

お入て

なまや

ちれ侍

女房え

本負ふ

夫のあ

めれば

まこと

もる世

のいろ

ぬく

たごう

のそを

辨おし

あま

かよむと

早んか

ちかか

るめで

たれる

るし

秘を御

ひ

ころあ

つたゆ

と中う

ぬく

まご子

ごりの

身よさ

るも見

おあつ

た行末

のちう

とさあ

つ

よとそ

打ぬら

るる

し

秘を御

ひ

あつた

あつた

せらる

此と日

さるわ

つたあ

つて

不承承

させ

る

女房う

ねての

さきども

今とて

あて

しる体

よりて

服し

脚も疲

れたの

公よ

さきども

さきども

かあつ

たの身

持を先

切させ

さきども

さきども

さきども

さきども

さきども

さきども

さきども

さきども

さきども

らるゆ

人

福六公

中よ

女房の

さきども

を感し

かあつ

た

もさき

ども

不承承

をあき

さうと

あつた

させ

し

陰

あやま

ら

中身よ

きま

まだん

隠しつ

つゝ

さき

ども

今入陰

方あ

く

此と

て

打ぬ

らる

なり

さき

ども

女公

よ

さき

ども

恨も

あ

らん

が

何と

ぞ

隠

け

り

あ

り

か

き

あ

き

せ

う

人

の

そ

ら

こ

の

子

と

ち

や

本

良

育

し

捨

や

而

の

わ

く

も

好

も

あ

つ

て

痛

ぬ

ら

る

ご

の

わ

く

も

さ

き

ど

も

救

む

と

お

入

て

な

ま

や

ち

れ

侍

女

房

え

本

負

ふ

夫

の

あ

め

れ

ば

ま

こ

と

も

る

世

の

い

ろ

ぬ

く

た

ご

う

のそを辨おしあま



腰元由奈

拾五席



善母
老實



梧
五



見
三
谷
舟
宿

とひ
きつておめよかしらな〜
か〜
か〜

トもあつて。宿よりつらひよまる男のこころひき〜
わのゆて。やまもぎりつるの男。まきまのまきまの火をえよ〜

おま〜
おま〜

後入ので。ちやぢり大まきま〜
か〜

ぶけり。ま〜
か〜

ま〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

か〜
か〜

己が程と志らざるゆ人は善なるも亦して悪なるハ
 情の中ありて。女の身也。其の事ありて
 かゆな福去の寂し。身のかほと志す。女子後ち
 ことよふとせんとかりよらる。捨ふ所が救済と志す
 静よて。福はよき事づく云とある也。ふんく赤智ハ
 持たしよはせり。捨るを勸告せんとのお清き御
 實好しきおの事取よびし事。此の當はよき事
 持と申て。其の事おとせり。捨るのおおしき事
 して。親族申とせよ。其の御長一匹くする事
 かんひらうの事。今も捨るゆ事。いらや
 ちうひんと。やとれたらる。因らあしをして。何事
 もよよつらど。此はよき事。あしとせり。捨る
 捨るよつらど。かん中人。赤内のこと。わらわ
 かわるよ。福は御長。あしとせり。かんよ。捨る
 うるものもさく。其はよき事。いらや

己が程と志らざるゆ人は善なるも亦して悪なるハ
 情の中ありて。女の身也。其の事ありて
 かゆな福去の寂し。身のかほと志す。女子後ち
 ことよふとせんとかりよらる。捨ふ所が救済と志す
 静よて。福はよき事づく云とある也。ふんく赤智ハ
 持たしよはせり。捨るを勸告せんとのお清き御
 實好しきおの事取よびし事。此の當はよき事
 持と申て。其の事おとせり。捨るのおおしき事
 して。親族申とせよ。其の御長一匹くする事
 かんひらうの事。今も捨るゆ事。いらや
 ちうひんと。やとれたらる。因らあしをして。何事
 もよよつらど。此はよき事。あしとせり。捨る
 捨るよつらど。かん中人。赤内のこと。わらわ
 かわるよ。福は御長。あしとせり。かんよ。捨る
 うるものもさく。其はよき事。いらや



親類



捨
五郎



本
事
番
以
与
治
郎
兵
衛



福六

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial character, possibly 'シ' or 'シヤ', followed by several lines of text. The script is dense and characteristic of early modern Japanese writing. There are some small annotations or corrections in the margins.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial character, possibly 'シ' or 'シヤ', followed by several lines of text. The script is dense and characteristic of early modern Japanese writing. There are some small annotations or corrections in the margins.

何も入ませ

なしてありさぬこと

そいつらにき。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

まぐ。あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

あつたあつた。いひまの勢い。あつたあつたトいふは

